

図書館におけるビジネス支援の可能性と課題

山口 啓太

藤枝駅南図書館には、毎日多くの人々がビジネスに関する相談に訪れる。相談内容は、新しくビジネスを始めたい、すでに始めていて困ったことがあるから助けてほしい、協力してくれる人教えてほしいなど人によってさまざまである。こうしたビジネスに関する相談に図書館が活用されているというのはどういうことなのか、図書館で支援を行うことの難しさはどこにあるのか、それらを明らかにしていくのが本論文の目的である。

調査は藤枝駅南図書館を中心に静岡市にある御幸町図書館、東京都立中央図書館の三つの図書館で質的調査によって行った。藤枝駅南図書館は図書館の一角にエフドアという支援センターがあり、ほぼ毎日相談を受け付けている。また、定期的にさまざまなテーマでセミナーも行っている。藤枝駅南図書館ではそのセミナーへの参加と相談現場の見学をし、どういった問題を持つ人が来てどういった雰囲気で行われているのか、図書館だからできることは何かなどを調査した。職員の方にもインタビューを行い、図書館で支援を行うことの利点や抱えている課題、今後の展望などを伺った。御幸町図書館は、静岡市産学交流センターと併設されており、自分で調査したい場合は図書館を、専門家に相談したい場合は交流センターを利用する、といったように役割分担して支援を行っている。御幸町図書館では図書館、交流センターそれぞれの職員にインタビューを行い、セミナーの見学も行った。都立中央図書館は図書館にビジネス支援の部署が設けられ担当の職員がセミナーの開催や展示を行っている。こちらでもセミナー見学とインタビューを行った。

調査を通して分かったことは、図書館という気軽に場所でビジネス支援を受けられることには大きな意義があるということである。商工会議所や銀行にいきなり行くのは敷居が高いと考える人は多く、そうした場所に行く前段階として、専門家に気軽に相談できる場所があることは重要だ。また、チラシを作りたい、各メディアへの展開を考えたいなど細かい相談事にも対応しているため、他では相談できにくいことも相談できる。しかし、課題も多い。図書館という空間は日本では飲食禁止で静かに本を読むという認識が強く、相談を受けるにしてもお茶を提供できなかつたり音量を落とさなければいけない。また、平日仕事をしている人に利用してほしいと思っても図書館の閉館時間に合わせてセミナーの時間を組まなければならないと利用者も偏ってしまうなどの問題もある。図書館と支援の施設を別にすればこれらは解決するが、図書館に来る感覚で気軽に利用できるという敷居の低さは失われてしまう。これらを踏まえると一般的な図書館とビジネス支援図書館とを明確に区別することが必要である。ターゲットとする利用者のニーズを把握して適切な予算を組むこと、図書館の職員が常にビジネス支援に関わる体制を作れるよう体制を変えていくことなどによって、よりよいビジネス支援が実現できると考える。

(指導教員 照山絢子)